松平能見 池田

略譜 七

二百十一冊の内

内閣文庫
和書 類
三六〇八八 號
二一一 冊
一五六函 一〇 架

395

内閣文庫
番號 和 36088
冊數 211(129)
函號 156 17

信光君御代

松平源次 徳撰所紬紅

高九百六拾壱石余

家紋 九曜之葵
花葵
九曜酸漿
板笹
五三桐
又七桐

和泉守信光君八男

光親 次郎太夫尉

信光君
親忠君ヨリ仕数度の御合戦ニ軍功有

記録御用所

三河国額田郡和田郷を領す（石）○天文六年四月十六日死す三河額田郡能見村[illegible]寺に葬

重親

作七郎

長親男

信忠男にて[illegible]に仕ふ

信忠○永禄元年十二月十日死同

親友

寺小葬

次郎左衛門　号書

三河[illegible]合戦にて討死す[illegible]

中務大輔家人[illegible]今年[illegible]祖

重吉

次郎右衛門尉

永禄九年十六歳の時三河[illegible]へ

故ありしか、世をしのひ陰に隠れて
叢生境に引籠り住居せんとして論と
合戦首を捕りけるに依て賞し其
より松平弾正忠馬射昌安に任せ
この時
清康君初旅に出玉ふ時にも昌安
御供して見るところ手柄の働き感服し
清康君義術稽古の師相に定
なされ眼近に

廣忠君より
東照宮に至るまて年ハ天文十九年
東照宮駿府に下向の時府中宮崎
御城下今川治部大輔義元より數
騎を重く育場とこ別の御家人ハ
其の番内ひらかれ毎度出仕
勤むる處城代ハ石川太郎左衛門
大殿に出座懸年々ハ鳥居伊賀守
忠吉次郎大夫馬射幸吉ニ法軍

事の浮沈としては此家之年々今川
治部大輔義元の家士鵜殿日向守
居住仕候而三州宝飯郡の城に籠
りける
東照大権現御滞在ありつゝ御幼稚
御発向御ハ初陣なれハ三州の諸士
勇をふるひ貢殿ハ次郎太夫を長
信長ハ諸士て先之城下に戦ひ
も麻と典ニ二男長照郎等戦死す

家士名倉忠助なとも戦死し
三州の軍士等大ニ勝利を得敵
百余人を討取城に火を放ち御帰陣
ありける所義元ハ味方働の殊
勝を賞せられ一言ニ付味方
多勢のうち次郎太夫先祖鹿流
の名付早来りし故先の者ニいたし
合戦ありし時軍功格段の者ニ及ひしを
貝摘の手塗と名付られ感状を
賜ハられ

一永禄六年九月一向宗逆達の時酒井
将監忠尚ハ三河国碧海郡上
野城ニ籠ル松平上野守家次
宮内少輔親久内藤右馬尉信成次
郎太夫馬尉重吉に仰付られ所地此節
未幾城方の将氏酒部酒之允といふ者
三左馬允を召討し戦ハとま
方ニ抜群の働なり落之後
城方の軍士酒井与九郎と勝之ニ小

之助某ハ森川令方道氏復ス忠九助
廣正村越茂助忠右衛門國陣杉等
にてと守へ石きされ各粉かされ
隊方働の将玉等ニ付与九郎中
よりけ出見んとしまちは王數紫乃
うち令の廣人笠まハ忠為色の為
務指揮を将旗軍門迄とさ帰模
群ハく城方の軍士を撃討とき流
一同かまと伐目掛くるも打殺かく共

九郎も是まてに数度の合戦に功あらハしかく
若斬働見事なりしによりかく
高木の誉等の事次郎左衛門に告たる
天下のものとなるに至りて水野勝成備前京兆
と称す○天正四年頃の初浪人熊
谷氏に列し里に居住し一揆を催
鈴木兵庫居城同国足助といへる所
しかも彼地にて浪人数を集めて籠る
其後足助の城ハ鈴木氏より退去し

ひきゐ二俣村信康君御陣に加る次郎左衛門ハ
数度の戦功あらハしたり○
東照宮よりの上意にて信康君へ御付となる
足を任せ○同七年頃の初勝頼の
侍大将依田右衛門尉信蕃遠州二俣
籠城の時に味方無勢にて織田信長の
軍士を引て城を責てつきさ次郎左衛門
発向し諸軍に先んして城下に押寄せ
諸将の感賞を得二俣村に在て松平又九郎

康安年の比しは我老人居しく王の威き
しく当代の事とハ何とかいふ絵をの形竪
平山氏法を出んとて居た地家の軍
士らんと誰かするましき事ともなしとも
止りて俄かに先頭を引しかなかりす
このりしかゝるを生し安住事なる志
第一の武功老人にハ似さりしかは佐
賀の中佃ハつ天正八年八月廿七日
死ス拾三歳同年ニ葬

重玄

阿紹和尚軍尉　大島夫文

初云洪

元徳二年三月是助に地侍島崎
孫八の風学よりて同じ百〻村の跡を
青山に於て文義門弟人と並し
百〻村に池島崎の番頭と鍛冶園
もくさき
東照宮の御よゝ百々村棚と名付候

などいひし夜中所々に篝火たかせ林中に岩石を
すゝめ置に一揆退散其後静謐す
属して同年四月上旬青山忠成の
地侍一揆を起し同出張して白旗の岩崎に
籠る同月廿日の夜に刈谷岩津村まで
打出で近辺放火せしかば青山忠成
青山半之丞文卯野小五郎来大黒善兵衛
三人は小命をうけ岩津村へ馳向合
戦しけるに弾正追崩し勝利を得て頭者は

真正面へ
討死し残を追討し斉藤山など云ふ陰に
合こる名をも云ふ文助門の同岡と云ふ
松村のなかにて手わけて討死す
敵は東より前田口へ入退く本多
上野介は夫し度との武功は御威を
蒙せられ其後ち大黒善兵衛にも
父之所に軍功を励討死せしより

註
父之代り小柄
大黒善作

伝市郎

重利

東照宮御幼年のときより仕へ永禄三年
五月織田信長か家士尾州別房山の砦
城今川治部大輔義元之軍勢指向
責戦
東照宮の御先にて重利従軍同月
十八日城を押て戦功を励み死

能見人幸衛門

重蔵

永禄之年十二月大日今川の家人鵜
日向守居城を遂に企之州寺部
鵜殿の時強府より
東照宮の従軍して発向し被而に
戦ふ同年四月十七歳にて討死

重之

原左別

小笠瀬之情

重勝　大隅守　初傳之助
今松平強右衛門親賢祖

傳七郎　傳市郎　庄兵衛

昌利
東照宮
台徳院殿ニ奉仕〇初父の弟死去ノ時
十五歳ニテ伯父傳之助重勝ニ従

見廻仰付られし所飯の内ニ在る石を取
あまる重勝并ニ傳七郎昌利家人
後藤角兵衛両人へ右意の趣仰付
らるゝ十五歳ニ成ける時也上一三百
厳命を蒙リ之を其後十五歳ニ成りしか
其脇ニ上りけるへしといへとも傳之助
重勝へ角兵衛ら再應申上けれハ一九
定めさしゆへ角兵衛御世に
東照宮へ上りしかハこれ文年昌利依而

三方ヶ原之節ハ頭並ニゆへ書ニ
段々御取立ニ而夫より御備之節も大番頭
小姓ニ而大番頭を勤る事なり依て
今又[illegible]依ハ御旗奉行
曲物は別ニ存候のなきとなるへし
角之書[illegible]御前之
遅しに又ミ 御前へ[illegible]参り依
前ニ行御例の[illegible]ある事ありて所ニ角
[illegible]との間の事ニ[illegible]切らとた

しかしなからさせしまゝ存候ある
ほとの紙を[illegible]通世なし
[illegible]便ニ思召[illegible]行
曲物ニ[illegible]者料百文拾貫文
の他之[illegible]差別ある天神之陣
甲州之陣 小牧之陣 長久手之陣
小田原之陣 奥州九戸之陣 名古屋
之陣とて七度供奉し 御感一家
[illegible]所夏冬之陣ニは

芳春院殿ニ住居平均の将依也縁ハ
ニ而勤むるに寛永十八年正月ゟして
関東より御下向ニ付十二月九日駿府ニ
て死去年之歳同年ニ葬

備前廊　二疋馬　勝馬

留書

慶長九年二月
芳春院殿ニ而勤ニ不小性ニ而召出さる〇

大番組頭より大坂在番ニは
芳春院殿住居松平伊豆守所ニ而勤
住居之陣ニは江戸ニ而留守居〇元和九
年四月
大猷院殿御入部の時附られ〇寛永
二年十二月十一日首ニ拾五石ニ年
の采地東国ニ而存候〇同九年十月
芳春院殿御遺令ニ而拾五石存候〇同
十九年十二月又御加増ニ而在番加秩

五百石○慶安四年同月初加秩九百石給○万治二年七月十二日致仕
○同年十月十九日死ス葬於相州
鎌倉郡和泉村松寶院ニ葬

昌秀

傳市郎　太郎左衛門ニ改ム

万治二年七月十二日家督△父の遺領三千五百石の内五百石ハ弟十兵衛へ分知三千石△父跡相続大御番
○寛文元年七月六日武州橘樹郡
六角橋寶清寺ニ住ス○同年十一月十日死ス年拾歳同寺ニ葬

昌勝

権九郎　傳市郎

初見の年月詳ならす延寶元年
五月廿六日死同寺ニ葬

昌永

甚太郎　初源之進　伊左衛門

二男惣領○寛文元年十二月十日

宝永四年小姓番入〇大番ニ入〇同二年
十二月七日死二十七歳同寺ニ葬

甫昌

鐵次郎 初 金八 伊太夫

次郎太夫 太郎兵衛

實昌秀之三男

寛文元年十二月十日分知二百石
〇同二年十二月廿一日大番ヨリ小納戸

承応二年分知二百石ニテ小姓組番入〇大和
二年六月二日大番頭〇享保元年八月病免
〇元禄十五年六月十八日死七十八歳
同寺ニ葬

勝信

庄太夫 作平郎

初 親喜
實森 春春院法印下二男

甫昌男子なく醫師森吉春院
法印二男ゆへ嫡子なりしかとも
吉春か紀せることハ甫昌家ハ
御祖父以来醫師の家なれハ醫師の子
ゆくゆく此名をつかさ不性松平久左衛門
康綱か方にしはしあつけられし 久左衛門

吉春院同

常憲院殿御おほへ上意にて家督と
元禄十一年十二月舞吉春子○同
十六年七月廿一日家継昌山出仕

○同十六年二月廿九日初見○宝永
元年六月廿八日大御番○享保六
年六月廿八日番勤の廃令之教○
同年九月七日同組与力○同十
年十月廿日病免○元文二年
七月廿七日致仕○寛延元年十二月
七日死七拾又来同寺に葬

光寛

太郎左衛門 初 多膳 太郎八

年月不知 初見○元文二年七月廿七日

家督 小普請○同四年十二月廿六日

大番○明和二年六月晦日病免

○同三年七月二日死 年六十三 法名日寿

葬

民庸

三五郎 利左衛門

宝暦十二年八月廿二日田安殿よ

り召され小普請となり扶持を給ふ

穂光

庄右衛門 初 金次 伊織

始観遂

寛保二年九月朔日初見○宝

暦二年十二月廿七日大御番○明和

二年十月二日家督○同四年

二月八日大御番組頭○同七年十二月廿八日二條

在京砌より　御膳番　御小姓組被
田安大納言殿御殿へ被相勤○安永十
年閏月十二日小十人入組○同年十二月
十八日布衣○天明六年十月十六日
御先手弓頭○同七年ニ江戸中町
方盗賊御締中ニ遠宮殿也ニ山田
十八日世上揉静ニ付加役御免○寛
政二年九月廿六日死去　浅之墓
同寺ニ葬

光福

次郎右衛門　初　今次

安永六年九月朔日初見○同七
年七月十九日小性組○寛政二年
十二月六日西丸勤番○天明二年十二月
廿八日大納言様へ附属○同八年
十二月廿八日依願御番御免
廿九日御役○同七年十二月廿八日

小金追廻班済る

台徳院殿御代

松平 継見

源姓 高昌信

家紋 丸内桔梗 五葉ささ笹

松平庄左衛門昌利二男

長右衛門

昌舎

台徳院殿ニ新規被召出 昌信〇

猷院殿ニ附られ西丸書院番被仰付

寛永十三丙子年〇 明暦元未年十月八日

死六十二葬谷中法花寺ニ葬

合治　長左衛門　初 庄九郎

大番○寛文二年六月八日死四拾九歳門寺ニ葬

合信　源左衛門

寛文二年十二月十日大番○宝永七年八月八日大番組頭○正徳二年正月七日死七拾蔵門寺ニ葬

義澄　庄九郎

宝永六年[illegible]月[illegible]日大番○正徳[illegible]年二月[illegible]日[illegible]御番○同四年十二月十一日新御番○享保十八年十二月九日死四拾武蔵門寺ニ葬

尚相　庄右　後仕正休

享保十九年二月二日西丸御小普請
○寛延元年四月二日致仕○安永八
年八月十四日死去九本松同寺ニ葬

義問　岩之助

実ハ義隆二男

寛保二年十二月養子○寛延元
年四月二日家督○同二年初而

御納戸○宝暦九年十二月十六日御留
守居支配○同十一年八月二日御本
丸御小十人組○同十二年十二月廿二日為
見附ニ明和二年十二月廿二日死四十
西葉同寺ニ葬

義員　源五郎　初 源次郎　長五郎

實ハ谷古市郎少弐曽 後仕 西鶴

明和二年六月八日継年十七子家督ヲ

嘗清○同六年四月廿四日大御番○
天明六年二月廿四日新番○寛政
八年四月廿六日病免○同十年六月
廿八日致仕

義宗

千橋

寛政十年四月廿八日家督小普請

東照宮御代

松平 後見

源姓

二万千五百石

家紋 丸内三葵 同花葵
同蝶紋 五分桐
五七桐

松平広忠昌利之男

傳三郎

重昌

東照宮之大一字給はり駿河駿府乃御中寄

召返されし 大番○寛文元年五月十

四月五日書院番頭同年十二月
十二日加秩弐百俵同八年十月十四日
死四谷西念寺ニ葬ル

利正

右近大夫 初市之丞 備前守

下野守 右衛門佐 市左衛門

年月不知 初大番〇万治元年七月十八日
新番頭〇同二年十二月廿六日兼盗賊
改〇同三年十二月十日中奥番

小納戸
厳有院殿より仕へ奉り名を改〇寛
文二年四月廿九日[illegible]〇延
宝八年七月九日加秩弐百石〇宝永
五年十二月十一日寄合
厳有院殿薨御後寄合となり東叡
山御仏殿奉行となり〇天和
元年八月廿一日[illegible]
九月廿六日

巌有院殿霊廟落成之節小田法会中
御普請ニ付とりしく令之旨被召出蔵
ともゆまうハ○同年八月九日新番に入
右近大夫之後○同ニ年八月廿一日加
秩七百石○元禄十一年二月十九日
死七十一歳同寺に葬

○

巌有院殿霊廟小十人組御番衆被仰付

元禄十一年十二月廿九日四男相渡
す

四辰

備晩

元禄六年十二月九日五味書院番○同
十二年七月八日家督○宝永二年
二月十八日逼塞○同四年八月十二日御使
番○同六年十月廿日病免○享保六
年三月廿二日寄合○同七年十月
廿四日死年七十七歳同寺に葬

○同年十二月加秩三百石余ニ併廿

一正継

新八郎

實父兄新太郎正尹二男
正徳二年十二月二日生○享保八
年八月廿二日始而小普請○同年
八月十六日御目見○同九年七月廿二日御書院
番○同十八年八月八日駿河国田中城
引渡十月朔日帰着○同二十年閏切紙
道奉行御蔵之年勤仕の定限

なれとも当分是迄勤仕元文之
年九月廿八日御使番○同四年十
二月七日大坂御目付代○同五年十二月
廿八日御暇同年十月朔日帰府○延
享二年十二月十二日関東国々巡見
同月廿八日御暇（切紙）○寛延二年七月
七日同名之御代官修理方分同年
八月廿八日御暇十一月朔日帰府○宝

暦元年正月七日同光之丞當役被仰付
つゝき御役被仰付再出勤〇同年十二月
十一日兵之丞与改〇同年十月大御番
織役加役〇同二年十二月廿九〇同四年
八月十八日死去年七十歳同寺に葬

正朝

新八郎　初秀次郎

宝暦四年二月十一日初見〇同年八月
四日家督小普請〇同六年二月右筆
書役見習〇明和六年正月廿八日御書院
番組入〇安永元年十一月十六日死
去年十七歳同寺に葬

正名

新八郎　初秀次郎

安永元年九月十六日家督小普請〇
同年十二月廿二日初見〇同九年十二月

廿八日御書渡之留

嚴有院殿御代

松平　縫殿

源姓　高千百石　家紋 丸内[illegible] 七曜

松平丹後守重直四男

太郎左衛門　主水

正方

明暦二年八月廿八日初而御目見　寛文
二年十月九日御小性組二番○
延宝二年十月廿二日御小性組頭

加増二百俵〇天和二年十月廿一日
加増百石〇元禄年中廣敷番ニ而来
地ニ拠御〇同四年八月十一日[illegible]
鉄炮頭〇同十二年八月七日死五十九歳
浅草海禅寺ニ葬

二百廿三

天野左馬 初 清三郎

[illegible]
実父[illegible]長崎奉行

二百廿四

天野左馬 初 岩松

宝永三年
十二月廿六日
御徒ヨリ

吉宗〇元禄十二年十二月九日家督
寄合〇同十四年十二月廿日初見〇同
十五年六月十日御書院番〇宝永六
年六月朔日西丸御書院番組頭〇
享保二年九月十四日死四十二歳
牛込小日向ニ葬

享保二年十一月廿六日家紀嫡子ト為ル○
同月廿一日初見○延享元年四月十日
死年二十東叡山寺中ニ葬

紀武

八郎左衛門　初又吉

実松平山城守書院勝方次男

養子○延享元年七月継家督小普
請○同年九月十八日初見○延享二年十二
年十二月廿二日御納戸番○同年
五月九日西丸御書院番○延享四
年十二月四日進物番○宝暦十
二年十二月十一日進物番病免○明
和元年八月九日死年二十東叡山寺
小ニ葬

正記

帯刀　初八郎　八郎左衛門

実父水原太郎勝紀二男

綱吉公○明和元年十二月九日家督小普請○同年十二月廿一日初見○同二年三月廿一日西丸書院番○安永元年十二月廿八日病免○同二年七月廿一日西丸書院番○天明二年又月廿八日死○年十二葬同寺に葬

正融

八郎右衛門　初　辰命

實松平周元ノ親章次男
安永九年十二月廿八日綱吉公養子○
天明二年八月廿七日家督小普請○
同年九月十九日初見○同六年九月
七日西丸書院番○寛政七年十二月廿日
小十人頭精勤する

東照宮御代

松平 伏見

源姓

一弐百俵

家紋 丸ノ内ニ葵 葵紋御免

替紋 五七桐

丸ノ内ニ葵 丸ノ内酸漿

右ノ内

松平左馬允昌利二男

傳三郎

重昌

東照宮之御勘気ニ依テ諸国流浪被致之

附テ其遂ニ落着候ニ付

大猷院殿ニ奉仕 大御番○寛文六年
五月十四日御書院番出仕御番ニ転ス○同年
十二月十二日加秩弐百俵○同八年十
月十四日死 足立郡某寺ニ葬

○

昌定　喜兵衛　九郎三郎

寛文七年十二月廿一日（二回目ニ）初見○同年十一
月廿一日新ニ弐百俵下サル 大御番○

天和二年五月廿八日病ニ由テ○元禄十
二年十二月八日復仕○宝永二年
十月七日死七十九歳 同寺ニ葬

光昌　市左衛門

元禄十二年十二月八日家督小普
請○同十四年十月十八日桐之間番○
○宝永六年十二月廿一日大御番○元文

同年六月四日大御番組頭〇
寛保元年七月廿三日病死先祖
寛延〇宝暦五年十月十二日死七拾五
来同寺ニ葬

昌利

茂蔵

享保二年十二月六日初見〇同十六
年十一月廿六日大御番〇寛延二年
九月八日加勤〇同〇同四年十月
十四日父死跡式相続御番〇寛延二
年十二月六日大御番組頭宝暦五年
十月十二日父死同年隠居
〇同八年十一月廿一日病死〇安永六年
六月廿一日死七拾以同寺ニ葬

昌勝

長三郎

宝暦十二年二月廿六日初見〇番丞

六年十一月十四日死去拾某歳同寺

小姓

藤太郎

昌廣

實ハ昌勝惣領

安永六年十二月廿六日嫡孫承祖○

同八年十二月六日叙爵小普請

厳有院殿御代

松平 結見

源姓

高五百石

家紋 花菱 丸内酢漿

鍬笹 五三桐

五七桐

松平勝左衛門昌吉之曾

市左衛門 初 權之助

昌忠

万治二年七月十二日家督五百石

○寛文年月日小性組○寛文年月日病免○

元禄九年八月廿日死　四谷法蔵寺
小ニ葬

昌太

十左衛門　初平三郎　主膳

初昌清
延宝六年己三月廿九日御書院番
○元禄九年十二月八日家督○享
保二年十月十九日致仕○同廿年
十月廿九日死　六十六　[illegible]門　葬
葬ち小石川葬

昌成

庄九郎　初主水

實植村三右衛門之某二男
享保二年十月十九日家督小普
請○同年十二月初入○同
年十月十八日御書院番○同八
年十月廿八日死　四谷法蔵寺　九十歳同寺葬

葬

昌信

次郎左衛門 初 織部

享保八年十二月廿六日家督小普
請○同九年十二月九日初見○元文
二年三月廿六日西丸書院番○
寛保元年十二月廿六日病免○寛延
元年十月九日西丸書院番○

宝暦四年十二月廿七日病免○同十二
年四月十二日西丸書院番○明和
二年十二月廿七日病免○同六年
閏九月日致仕○同八年八月六日卒
十五葬同寺小葬

昌豊

織部 初 主膳

實大屋平八郎貴直四男

明和二年八月廿二日御目見〇同
六年四月八日家督小普請〇同八
年十月廿二日西丸書院番〇同八年
二月廿二日比より病ニ付大納言様
附被仰付之〇同九年四月四日
若殿上様え御附被仰付〇女孫四
年四月閣殿え御附被仰付
〇同六年八月廿九日死六十九歳同
寺ニ葬

昌識（トモ）

十左衛門　初　鉄之助

初昌福

實大番修理昌直之男

安永六年十二月八日家督小普請
〇同年十二月廿一日初而〇天明八年
八月七日西丸小性組〇同六年
同十月廿四日西丸御納戸〇寛政二年
九月四日西ニ而傷ふく〈寄合

一元禄○○七年十二月廿六日小十人組将
御行(?)子○同八年十二月十日病死

附

大猷院殿御代

松平 能見　高二千石

源姓　家次　雷笹　七曜

松平丹後守重直嫡

圖書　修理

重長

寛永二十年初而分知二千石○
慶安二年九月二日御書(?)院御書
院番○万治二年八月廿一日御書院

書院番寛文四年四月四日病免
小普請○元禄二年十月廿四日死
六拾二歳浅草海禅寺ニ葬

重花

主税 初 八之助

寛文十二年五月廿六日御書院番
○元禄二年九月九日死四拾壱歳

同寺ニ葬

図書 初 平八郎 八三郎

勝芳

實重花惣領

元禄二年閏月初見○同年十二月　嫡孫兼祖
十二日家督小普請○同十四年九
月十二日御小姓並○同十六年十二月
廿一日御小姓○同十七年四月七日
御免小普請○享保四年十二月卒

六日寄合○同九年十月九日書
院番○同十五年七月廿七日小性組番
○享保十六年六月四日病免○寛
延四年六月廿日死七拾歳同寺
に葬

晴房　圖書　初　平八
寛保元年八月十一日初見○寛延
四年八月四日家督寄合○安永七
年六月十四日死七十六歳同寺に
葬

親章　内記　初　安太郎
實松平東市正親純二男
宝暦二年八月廿四日養子○
同九年十月廿一日初見○安永元

年十月十二日死ス跡目未ス同年
に葬

勝政

圖書　初　八之郎

安永元年十月十二日嫡孫承祖　実親章忰

○同四年閏十二月十八日初見○同

七年閏七月七日家督無相違○

寛政二年十二月十八日ニ[illegible]

○同八年九月廿日ニ[illegible]○同

十年十二月廿一日圖書ニ改

大猷院殿御代　呈書ヵ出之

松平（結城）高武子依

源姓　家紋　葵笹　七曜

松平丹後守重直之男

兵庫　氏初　御紀　宮内

直改

正保二年頭初　是松平市正英親

寛文ヵ紀〇参安足年頭初

厳有院殿御小性〇同年八月十六日

叙爵○明暦二年初而小性中奥
寄合○辞職元禄五年七月十八日致仕○元禄十一年十二
月八日死六十八歳浅草新堀海
禅寺ニ葬

直賢

主庫　初　権助　傳門

元禄十一年七月家督
初仕　一言
家督寄合○享保七年
七月十二日致仕○同十五年六月十二日
死六十九歳下谷ニ山門院ニ葬

武郷

織部　民級

享保七年七月十二日家督寄合
○同十一年初而五度番○同十九年
初而御腰物番○元文二年九
月十二日林田信濃守八ツ小路屋敷

断絶

武清　幸十郎
父政易の時ゟ同く政易家法道ニ政治云
宗ニ召英信寺に葬る同年十一
月廿二日　将軍　宣下の日依
政易卒兄

台徳院殿御代

松平 號見
源姓　高昌信
家紋 丸内ニ桔梗 分桐
松平左京亮昌利二男
昌倉
長兵衛
台徳院殿ニ新規被召出 昌信ニ
駿河国御附ニ被召出ニ御旗ニ
寛永年中ニ明暦元年十一月八日死

六條一条表式部口谷法泉寺ニ葬

舎治　　安左衛門　初　庄九郎

大猷院殿御代大御番ニ、寛文二年六月八日死、四谷乃象門寺ニ葬

舎信　　源左衛門

寛文二年十二月十日大御番ニ、宝永七年八月十八日大御番組頭ニ、正徳二年二月七日死、長福寺門寺ニ葬

義隆　　庄九郎

宝永六年四月六日大御番ニ、正徳二年二月廿四日家督、同日御番ニ、二月十一日新御番ニ、享保十八年十二月

十九日死ス号福九条門守ノ弟

昌相　庶子　實任正体

享保十九年十二月二日家督出家清
〇寛延元年四月二日移住〇安永
六年八月廿四日死ス号福九条門寺
少弟

義問　岩之助
實義隆卿ノ男

延享二年ノ年十二月四日元子〇
寛延元年四月二日家督出家清
〇同二年九月十六日元服出納戸〇
宝暦九年十二月廿六日蒙勅勘の賞
今ミ出奔〇同十一年八月十二日ニ丙方

同願人○同十二年十二月廿二日免

同願人○明和二年十二月廿二日死

指父家同年ニテ断絶

義真

源左馬　初源次郎　長左衛門

実神谷与一郎久武二男

明和二年五月六日家督小普請

○同六年十一月十四日大番○天明

六年二月廿四日新番

大猷院殿御代

松平 [illegible]

高三百俵

源姓

家紋 丸ノ内ニ葵 三葉葵
丸ノ内酸漿ニ[illegible]
五七桐

松平勝左衛門昌吉嫡男

勝左衛門 初 上之助 次郎[illegible]

照昌

次郎右衛門 宗右衛門 吉左衛門

庄三郎

寛永十八年七月廿日初而奉拝

二年十二月廿六日厳有院殿御小性組
○同二年九月西丸御小性組○組頭
元禄元年十二月十八日廩米二百俵○同
二年九月十八日御小性組○元禄
四月初病免○同十六年五月廿七日
死七十法名宗麻寺大泉寺ニ葬

光禄
次郎大夫 初 權左衛門
又左衛門

寛文十一年九月廿八日初見○延宝
六年十二月廿九日御書院番○同八年
三月廿九日二百俵○元禄十年
月廿一日桐之間番又五郎ト改○同七
年七月十二日病免○同十年二月
十九日御書院番○同十六年五月廿
七日父死同年家督○
享保十年十二月廿六日老免○同十
二年五月廿六日死七十二法名

寺ニ葬

二男 松形
光忠　又次郎

元禄十四年九月廿日初見〇宝永
六年閏正月六日中小性組〇享保十年
十月十二日死同寺ニ葬

四男 松形
光隣　大蔵 初又五郎 主膳

右門　致仕 松嶺

享保十一年十二月廿二日惣領〇同
十二年八月二日家督小普請〇
同二十年七月十二日御書院番〇明
和二年十二月廿七日病免〇同六年
閏六月致仕〇天明七年八月廿七日
死八拾七歳同寺ニ葬

光明　又三郎　致仕 清水

家督相続○宝暦八年八月二日初見
○明和六年四月八日家督相続○安永三
年七月廿日西丸御書院番○同八年
九月晦日病免○寛政元年四月廿
二日致仕○

光信　千次郎
寛政二年（[illegible]）九月廿八日初見○

東照宮御代

松平　始見　高五百石

源姓　家紋　丸内ニ笹　引両

松平大隅守重勝二男

淡路守　初　伝太郎

重長

東照宮ニ奉仕御使番并新知二千石○
慶長十七年頃加増ニ従五位下叙爵
職ニ附られ兄母[illegible]

故本番改仕舞らせ後當家者ハ越後
ニて浪人いたし候て追而分仰ゆへ
父と同様浪人致候九年冬大坂
御陣の時右信政江戸留守居右江
戸せしめ大坂へ出使ニ命下されし後越後
津守門殿より病を被わずらひ候て
さ御暇療し慶長二十年三月晦日
死四十二歳 糀町心法寺ニ葬

重則

大隅守 初半三郎 内膳正

寺則孫松平伊豫次郎重利万治
元年江戸死家断絶

重信

源吾

御書院番二而信昭南直之時殿中
ニて牧野伝大平又十郎を殺負傷
寄合ニて切腹 二十歳

勝隆

出雲守　初忠良　市正

法名　覚雲

慶長十八年月日不知初御目見〇同十八年
月日不知五百石〇同年十二月廿日
駿府にて謁見せし時大番頭を
命ぜらる〇同十九年冬大坂陣
東照宮又御旗本に在て十二月二条
の城に供して〇同二年十二月二日

東照宮又二条より駿府に還御の時
台徳院殿は未摂州勝山に御在陣
の時松平石見守康安水野備後守
分長等と勝隆二人命ありて別所山
城守に居る〇同年
台徳院殿御覧へ還御の時彼地へ石さ
き太閤の御跡山の御番を承る思召
御意の旨をうけて二人衣服羊数つ

なされ夫より駿府に御帰座ありしか同
日本夏陣にて御手の無勅にて五
月七日落城の時
東照宮御旗本を崇間山へ御あやうき時
此とき鉄炮の名人諸軍儀に続
勅を勝隆検[illegible]提藤村抜出て
町井出んとせしに味方弘房の
鉄炮[illegible]隆働勅時ますの指南あり
平松出でさうへ杉林の名誉なし

夏の陣ともし[illegible]逃出る[illegible]
小牧御帰陣の後
東照宮御旗本大番組敗軍の吟味
勝隆一人に仰付らる同年元和八月
其後駿府城門の御検分へ
召され[illegible]御敷へ[illegible]度と命
せられ御目見之越後之同
見さこえ帰府の後
東照宮御例の御寝所へ[illegible]

如之丸御請取之○同十一年四月
薨御ニ付江戸へ参府
台徳院殿ニ奉仕大番頭○同二年
朔日二千石加秩○同年十二月叙爵
市正と称す○同六年四月朔日
大坂御城番○同年十二月朔日二千石
加秩○同九年六月
大献院殿ニ奉仕御上洛供奉之節
御道筋のうち大番頭ニ而奉之

正盛大坂城番命せられしに正盛
但馬の名称許さる思召ありて但馬を絶
と今勝澄○同年十二月極村
加判と寛政大番頭御任せられし付
正然の名字許され寛政五○寛文元
年七月大坂御城番与力十騎同心
小付されし同二年八月帰府○同四年
七月
大献院殿御上洛供奉○同六年七月

大坂城代同七年八月帰府○同九
年十二月五日松平越後守光長妹
大蔵少輔殿御年女子歳ニ而九条家
大納言兼晴へ御入輿の時使者○同
十年十一月九日奏者番兼大番頭
○同年十二月 細注 大坂御定番○同十三
年六月
大蔵少輔殿ニ而座居候○同年九月
松平中務大輔忠知卒去後遺領

松山へ替られ老臣の事とも指揮を
同年十二月 細注 帰府○同十二年
閏四月遺領松山城を松平隠岐守ニ
引渡○同年十一月九日奏者番寺社奉行
兼帯して大番頭を兼るの事もと
ゆるさる○同十二年四月日光山
使者○同年七月七日留守居伊賀守
忠雄死後松平大蔵大輔文左衛門與
勝澄朋友巌之一もとれ

查沢の事なと勤む○同十四年二月朔日

別當京より上様起り同十五年二月一日

松平伊豆守信綱戸田左門氏鉄と共

彼地発向の使将軍家の名代を勤む

らる是日御發向之例吉田より打出る藤堂

の日三有々仕く東京安清一郎同月

又日五位をり告帰府○同十六年

正月廿八日四千五百石加秩合て一万

五千石と信国佐貫城を仰付らる

○同十七年四月日光山御社参の時

供奉を勤む○同二十一年四月日光

山御参詣供奉を勤む○正保二年四月同

○同三年

東照宮の廟前に別額国郡御祈する

御遷宮九月十七日御遷宮正聞○同

四年二月九条道房公薨去御門よりつき

上京○同年四月日光山御参詣供奉

○慶安元年四月

東照宮二十一回忌日光山におゐて法華八
講執行の時法会奉行となり御途中休息
内藤志摩守忠重宅に御休息ニ而其
御膳御相伴　○同二年
厳有院殿御代日光山ニ御参詣ニ付秋元
越中守ニ留守被仰付日光山○同年九月
紀州高野山の学侶行人公事争論
ニ付久世大和守廣之稲葉より当
正則并土屋但馬守数直並小勝隆

大猷院殿御前にて作事に無覚束
一山の僧侶に備進　同年十月御暇
○同二年四月日光山御宮御社参奉行
○同四年七月御留守中
厳有院殿御代として
大猷院殿霊廟小焼香○前斎惣二十
四月日光山において
大猷院殿両御霊屋御法会執行ニ付法
奉行　○同二年九月廿日

後光明帝崩御之節御葬送御役人
掛り上京○明暦元年九月御辞退
日光山存孔の事に付き掛り上京同
出羽守同じく○同二年十二月大夫
織部頭被任候○万治二年二月廿一日
四番衆當惠寺住持與頭陳申請
○同三年九月親射十月御府同
年十二月下府○寛文二年
九月御日被任○同年十月七日判

寛文覚与同八月八日被任の御
黒書院次直の格に而被仰付候
多年の勤労により今年もと体
書之御一の卿と無那る翌九日
勤江戸新掛（古依先例賞與方家）被之○同
六年二月十日死七十七歳ニ而
國依贈花谷勝隆寺ニ葬

重隆　三四郎

寛永九年七月継目初御目見同日ニ寄
合ニ被入御書院番ニ被仰付
同年七月廿日死

勝広

某別

実ハ某　初信太郎

重治　修理亮　初宮内　伝三郎

宮内少輔　おなしく　三十郎

実父式部大輔某嫡子

慶安元年六月廿八日養子

同二年六月十二日初御目見同四年

三年十二月廿七日叙爵同年宮内少輔

被仰付寛文二年九月晦日卒

然○同年十月八日御暇
ありおゐてまゝ致○同二年
正月九日伏見へ御出○同四年
四月九日日光へ参詣有之○
同年六月より於伏見御留守
頂戴之候處伏見城ニ而奉公
不ず○同五年十二月
廿六日より上らる○同七

年於大坂御城七月御暇同
八年同月十六日帰国○同十年
四月十二日江戸参勤○同十一年十一月
廿二日於伏見御対顔同年
二月廿九日帰国○同十二年正月
廿八日佐土原城へ移り二重櫓を建○
慶長十九年十二月廿七日於中嶋
于時大坂御陣○同元年十二
月十九日同上○同元年十二月廿二日

右往古ゟ葛役○同七年十月廿
六日八丈島着船○同八年六月
厳有院殿御葬送之節御用掛り○同年十
二月廿二日越後中将光長家老永見
大蔵荻田主馬小栗美作争論吟
味掛り○同九年六月廿一日大老間ニ而
常憲院殿御直ニ御吟味の時出座○
天和元年十一月廿一日修理亮ト改
○同月廿八日病免○同二年十二月病

の間若年寄の所へ参る（御評定の席へ参る）（従領）○貞享元年十一
月七日評定所ニ而吟味中保科
肥後守正信ニ出逢○同月十日紀伊
守ゟ書状ニ而此段被仰来
之面信と偽○同二年十二月二日出府
紀伊守列合律ニ赴き○同四年八月
二日病死ニ而死ス于時年七十四
卒去之文書重捨修ニ而合律死

若松町融通寺にて火葬同郡
南青木村大窪山に葬

重宗　但馬守　初　伝之助

寛文十三年十二月八日初見〇延宝
七年十二月廿八日叙爵〇天和元
年十二月九日死十八歳法名紹圓

天羽郡佐貫花香谷勝隆寺に
葬

曾
勝秀　圖之助

貞享元年十一月十日父重治保科
肥後守正容に預らる是父の科によりて
同日肯山三郎とあらため桜田屋敷
住之よ移らる〇同年十二月七日信之
所従大和山郡に於て移住〇同一

年頭山より下総国古河へ所封よ
つき相続して古河を襲封○同年
十月廿五日廿才小二郎信政と改名○
元禄二年八月十三日石見守となる信
同月十八日為名○同四年十二月二日初
見へ○同十一年十一月二日若年寄兼勤
に換備○享保十二年八月廿七日死
年六十一葬浅草龍宝寺に葬

信方

小三郎

初 辛安

貞享元年十一月十日大久保守忠の科
小より兄を先小松平日向守信之へ
出仕○同六年六月廿六日出仕御免
○元禄十二年十二月六日松平忠九
郎に勝割すとするへ同十四年
正観かくし実家へ帰る○二十三歳
猶長兄与家承川 小五郎 早世

志く嗣子たらしむ正徳二年七月
九日小太郎名跡を志く旧領のうち
二百石をわかち与へらる家

勝文　次郎助

實今川民部範正か曾
享保十年十二月二十六日若年〇同十
二年十二月四日家督を相續〇元文
四年二月二十二日初見〇延享二年
九月十二日西丸小性組〇寛延二年
二月十九日死す年二十八東円寺に葬

勝興　傳三郎

寛延二年四月二日家督を継小普
請〇明和四年八月十日西丸書
院番〇同四年十月十八日寄合

将軍家斉公ニ拝謁〇同六年二月廿
一日於小十人場所拝謁時服弐二日
令家督相続〇同七年四月十四日御目見
小普請〇寛政二年四月廿二日免
世話取扱〇同年十月廿一日大的上覧
時服二拝領

大猷院殿御代

松平 能見
源姓

二万五百石
家紋丸ノ内笹
紋桐

松平出雲守勝隆二男

勝廣

安藝守 初 傳兵衛

実松平淡路守重長次男

寛永九年二月初而御目見○同年
七月十二日初見○同年十二月
廿一日叙爵号淡路守○同十二年
六月廿二日落依願○同十二年
六月二日追身○寛文十二年
十一月廿二日死年五十九家麻布
正信寺ニ葬

勝制

忠義　初大次郎

母某仲某姫某要　後住雲山

寛文六年十二月十九日父家督
之儀新田知行五百石分知○
同七年十二月廿二日初御目見○

同七年十一月廿一日御書院番
○同十一年六月廿六日御納戸頭
○貞享元年十一月七日御書院番
松平修理亮組与頭を付の
者ハかりしく 御科 服徳之容
小田抵にノさせん成る御割
御納戸番より先之ニ出同月十日

役料被下同年十二月廿四日奉書を出
事免御目見ニ出同月廿七日廊下
番より五百俵被下同年十二月廿一日
御同見人を之出○元禄九年四月廿一日
御書院番頭同年十二月十八日
布衣○同十一年七月二日五百俵を
高地を(操)補○宝永二年六月十四日病
免○享保十二年十月九日致仕
○同十二年十二月二日剃髪宗雪と

○元文二年八月四日死九十歳同
寺ハ高輪

勝関

忠左衛門　初ニ庄左衛門

初ハ二千石
實今井権左衛門種房之曾
宝永二年四月廿七日御目見
○享保六年八月九日初御目見○同十二
年十月九日家督小普請○同二十
年十二月朔日田安勤番○元文元年
八月廿八日病免○寛保元年十月
廿八日再勤小性組○延享二年七月
七日御近習役○同四年十一月六日
御近習役御免○同五年五月朔日寛
小性組番○同年十二月廿一日西丸
○宝暦八年十一月廿八日西丸御
御役○同十二年八月六日西丸勤

○同十二年七月廿日
惟信院殿御霊屋番の後紋賞入可被立置候
○同年十二月十五日病身済ニ明和八年
同月六日老年人座紋賞入可被之旨候
○同年十二月十三日死七十七歳同寺
ニ葬

勝詮

二郎太夫　初　猪太郎

寛延元年十一月廿八日初見○明和
元年八月九日死四十七歳同寺ニ
葬

勝武

大隅守　初　又三郎　大隅守

寶勝院殿

明和元年九月九日嫡孫承祖○同
年十二月五日初見○同八年九月
四日家督相続小普請○同年十二月廿

同日為右少弁書博士○安永二年
十二月廿八日病免○天明元年十一月
廿五日再任少納言○同年十二月十八日布
衣○同八年十二月二日為兄依少納言○
同六年十月七日為兄勅○實成
二年十月廿一日為小將上○同四年
十二月十六日叙爵大属也○同七年
正月廿日少令精修者○同九年
七月廿一日為小將陸路

勝負

忠嘉　始千太郎　又太郎

實大田播磨守之房清男

天明四年十二月廿四日繪所預子○
同八年十一月廿一日初見○寛政十一年
六月廿二日為小納言○同年十二月廿
日布衣

自信濃飯山御代　佐久郡移封

松平　能見　二万五千九百石

源姓　家紋　[illegible]

松平大隅守重勝之曾

大隅守　初半次郎

重則

内膳正

寛永十八年　[illegible]

月朔日従位○元和七年十二月十一日
大番頭○寛永二年朔日大坂城
番○同三年六月
天樹院殿御近ニ付播州姫路ニ赴く
○同年九月
去所か其京の旁江戸ニかへく
常源院殿御遺例ニつき京都之
留守役○同年十二月叙爵○同
十二年朔日ニ病ニ依テ死ス葬当

○同十八年十二月廿七日死年五十二
葬心光寺ニ葬

重正

主膳正　初太郎八　同道

寛永十九年六月御目見○
正保二年二月朔日大坂加番○慶
安元年十月同上○万治二年
十二月廿八日叙爵○寛文二年

九月二日死四十歳同寺ニ葬

重利　傳次郎　初 忠兵衛

寛文二壬寅年十二月四日家督〇同
年十一月謁見の日父ノ重ニ病ニ付
[illegible]の御膳番と號ス〇同六年十
月廿四日死七十歳家[illegible]ニ葬

[illegible]

松平輝澄　池田　六十二歳　家紋　揚羽蝶　祇園寺

光政公ハ同父ノ輝政ガ家督ノ時寛文[illegible]
十二丙年寛[illegible]松平ノ稱
号ヲ許サル

同後[illegible]　松平　初松平　[illegible]

輝澄

慶長十二丙年寛[illegible]松平代[illegible]時

母ハ良正院殿ト号ス後藤[illegible]ニ秘ス
修理殿ハ 法名ハ[illegible]寺ニ[illegible]追号[illegible]院殿[illegible]
順令寺[illegible]ニ一時ハ日[illegible]
有之 御母堂
要[illegible]殿ハ法名ハ日蓮宗ニテ[illegible]法華宗
松平代々[illegible]男[illegible]公宗[illegible]
号[illegible]
修理[illegible]殿ハ松平代々 [illegible]十二万石[illegible]
[illegible]日蓮宗ノ[illegible]

忠継[illegible]宗[illegible]
御遠行[illegible]
服元[illegible]十三万石[illegible]
大坂冬陣[illegible]○同[illegible]年六
同[illegible]二万八千石[illegible]
○元和二年[illegible]○同[illegible]年
[illegible]
[illegible]大坂[illegible]
[illegible]寛永三年

年十月十九日依病免御役之處
是迄寛山御屋敷之處子弟云○同年
江戸屋敷御見分之上萬石 御供被
嚴賢人
台徳院様
大猷院様御逝去 土産人之處蒙慰之處
台徳院様御溜金助賜賛真之御料所
大猷院様御判物頂戴仕候○同三年
十月廿六日御郡代九郎之 ... 被成下
御蔵入○同八未年八月播磨国
佐用郡宍粟郡二万石被成御預八千石
○同十七辰年七月廿八日御代官相勤ニ付
領知被下置同国御料所之
万石余支配父子共同国所務仕候ニ付
此預り国之内ニ而拾石 江戸同国所
廣瀬之内ニ而五拾石取被下候
寛文二寅年十月廿一日病死

武憲 備前内記
松平伊予守綱政
ニ嫁ス

政也 能登守 采女

寛永十七庚辰年七月父ニ従ひ同
月江戸ニ於テ将軍家光公ニ拝謁
す 頼ヲ以テ明暦四戊年二月廿九日
家督 同年十月備前国
補 内ニ而五万石ヲ下○
万治二子年叙爵十二月廿八日○寛文二卯年十
一月十九日順同備前

家督相続之日同年辰年十一月
家督 寛文 ○同五巳年十二
月 元禄二年 卒

政武
評定所 久馬助

某
家督相続 内
寛文五巳年 家督
政也ヲ養ヒ同七年

於下交代寄合 御役料之百石之
之節ニ而死也 十歳迄 御預ヶ被
三女之中真[illegible]局 御役 [illegible] 没
去れ年之様 没後 池田之の様[illegible]
御所 貞享四卯年五月七日病死
五年第門寺

没森
初没安没豊没様

久馬助

初大千代

元禄十五年壬午月
十五日[illegible]
[illegible]閏十二月十五日卒

貞享四卯年七月十一日家督 元禄
丙申年六月十日 初目 貴人[illegible]享
保元[illegible]年三月十一日病死 二十八歳
門寺

七歳[illegible]月 池田[illegible] 没後[illegible]

伊賀守

初[illegible]

初没 [illegible]没様

享保[illegible]年十一月十七日家督 [illegible]
年[illegible]月 初目 貴人[illegible] 六[illegible]

年同月十九日奥右筆組頭被仰付○正徳四年戌
年御役御免寄合入被仰付候処同断御役御免
隠居○宝暦七丑年六月廿日
御番入同年七月廿六日家督○同
大御番同年十一月二日病死○同年十二未年

六月十七日
宝暦四年以後同三郎右衛門殿○天明六年九月
寄合隠居ニ而病死七十三歳池上本門寺
葬る

○明和九年四月十日被任

政
政部　永之助　初名弥五郎　久之助

宝暦元戌年十二月廿五日　初
御表右筆　御目見○同八寅年七月廿七日病
死二十五歳九月山本輪寺葬る

安永十年持地二持天　葬
　　　　　　　　是迄

廣興
宝暦十二年八月廿五日家督
○十年八月十五日
　　　　　寄合入
○同十三申年十二月廿六日病死二十二歳
池上本門寺

実奥平大膳大夫昌敦弟
但馬守　初源八郎　叙爵

松平（ヨシシゲ）昌睦

明和二酉年十二月廿一日初而御目見（二元年九月十六日家督同日）
同九辰年正月十一日御奏者番　安永二巳年
四月十一日御寺社奉行兼帯　同六酉年十一月
御役御免但上意之上御願之通御免同年
九月廿五日御奏者番　天明三年十二月
大坂御城代　同年十二月十六日叙侍従　同七年十二月
十二日御代替り

諱名　中務　叙爵
安永年中保加ニ而志願ニ而二男

文政五年十月十三日致仕同八年十一月十五日
卒九

家督相続同年御礼相済候由
然

十月十一日

隠居料　一橋

一御黒印頂戴之

一御隠居料之節万石之上御聞

中将様御家督之節

一右ハ先代大殿様御代御伝候

一 御家内次〻之人揃

一 出家之長当為法縁者無之

一 頭中法事之役相務候人之事

一 居屋敷之門殿并附属之寄附
次武家方衆附合之事

中絶之儀無之

一 先規石高之外之拝領之文揃麾下宗相
拝領之時

由緒書之事

当寺之開基院殿日蓮宗為 御朱印擡
州姫路日蓮宗静岡山本遠
寺之中 本遠之住職為拝領之
日蓮宗有之儀成寺石高拝
候頭之同寺山流川修寄附
蒙拝領之事則住職寛永
十七年七月朔日 右之通也
寛文 之候 年正月

一　日蓮真筆曼陀羅　一幅
一　法華経　但箱入　二部
右ハ拝領ニ被仰付候
一　右見分ニ罷越候処居宅ニ而饗応之様ニ
自然御所望之人候ハヽ為拝見
年々何月三部経本尊拝見
仕度旨相願候ニ付
思召候　御無用ニ可被成旨

法会相勤候由
一　右同村之所ニ出張之節通用之也
之儀ニ候
右法度ニ相成ニ付為之　之由ニ付
拝覧之節
将軍家之所出張之節之之
相当之義　思召之候
宿屋敷　十三日之夜御成
此寺　道中常之開帳

参勤之住居有早速二三郎合念之
住居被為成候ニ付病気ニ在之罷居候
御前御免之 此節住居被仰付
右被仰 度病気ニ付 御暇由

一 寛永九申年
台徳院様薨御 為御遺物宗近之御腰物
拝領被仰付候

一 増上寺
台徳院様 御霊屋 御門前 拝領仕候

地範二拝領仕候御納戸ニ而御渡被下
候事

一 寛永十七年七月 [illegible] 御腰物
拝領 [illegible] 御禮 [illegible]
[illegible] 御本丸 [illegible] 拝領文字
同様 [illegible] 拝領
国別 [illegible] 御 [illegible] 住居 [illegible]
小 [illegible] 候
候

一 寛文二年二月　輝沢死去ニ付無住ニ
相罷成候付住持
能芳与没出願候処申付霊巌寺え被
同寺院霊巌寺書置一寺　被仰付
小石川禅寺建中被為　仰付
上同寺主空宗寺達立一同霊巌寺
之申候
一 為助後継以来被相成禅寺
申候

蓮光院触　山号寺号無之右禅　寛文元
年中地内ニ長福寺再建之
候処禅寺え仰付候
願済候段之　山号寺号但右禅再
建候
一 寛文六年蓮光与没出死去ニ付
同六年没出寺院為助後継
被住候
右之通申伝候処相違無御座候　山元梅英巨山

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan